

ふるさと見て歩き

第24回

戦死十七士合葬墓

▶戦死十七士合葬墓



国道一二三号線、那珂川大橋を通過してすぐ北側の道路沿いの高台に目を引く形の石碑が建っています。幕末の混乱の足跡を残すものなのです。

◇野口宿の戦い

慶応四（一八六八）年一月に始まった戊辰戦争は翌年にかけて各地に余波をもたりました。旧幕府軍の北進とそれを追う新政府軍の戦いは市川、流山、結城、宇都宮などを戦場としたことから茨城県を南北に通る幾筋かの街道も諸軍が通過し、戦禍を残しました。

四月十一日、江戸城が新政府軍に明け渡されたあとも幕府軍は各地でこれに抵抗して蜂起を続けていました。十三日、その中の一隊約百三十名が野口宿に宿営し、翌朝那珂川を船で下ろうとしていたところを新政府軍に急襲さ

れ、十七名の犠牲者を出す戦いとなりました。幕府軍ということで遺骸を公に葬ることがはばかられたため、近隣の人々により密かに埋葬され、のちに現在の地に碑が建てられました。

この一隊については様々な説があり、彰義隊の一部であるとか、上総、下総の戊申戦争を転戦してきた撤兵隊であるとの説がありますが、明らかではありません。「撤」には「放つ」、「なげうつ」などの意味があり、もともと撤兵とは砲兵部隊である持小筒組を指しました。これが慶応二年に改編されて撤兵と改称されました。しかし、上野の彰義隊戦争は五月十五日に起きていたため、一か月前のこの時期に野口を通りかかっていることに疑問を呈する声もきかれます。戊辰戦争の諸軍はめまぐるしい戦況の変化によって組織名、機構

などの変化も激しく、隊の名称や指導者が変わる事もしばしばあるので、これを特定するのは難しいかもしれません。

◇二人の少年

それからほぼ二十年を経た明治二十二年（一八八九）年、戦死した十七名のために野口の渡しを臨む高台に建てられたのがこの供養碑です。建碑には、近在の協力者二百六十三名がかかわる大規模なものでした。そして題字を幕府軍の参謀で歩兵奉行を務めた大鳥圭介、撰文を水戸の佐久間謙、書を野口雨情の叔父で県議会議員を務めた野口勝一が手がけました。葬られている十七名は仙石義正、秋山善保、榎本桂次郎、山口藤吉、坂巻錠介、徳田米太郎及び氏名不明の十一名です。このうち、寿命寺の境内には「彰義隊の墓」と刻まれた徳田米太郎の墓が親族によって建てられています。十七歳の若さでの戦死でした。

「彰義隊」という墓を建てたのは五十年を経過した昭和十五年のことであり、この表記についても議論の分かるところです。

また野口花山には坂巻錠介の墓



▲彰義隊の墓（野口・寿命寺境内）



▲坂巻錠介の墓（野口花山）

があります。坂巻は更に若く十五歳でした。重傷を負ったところを野口の有力者、関澤源次衛門が手厚く治療し、親元へも連絡するなど手を尽くしましたが数日後に亡くなりました。関澤家では坂巻の遺骸を自らの墳墓の傍らに埋葬しました。

市内でも意外なところに幕末維新の余燼をみることが出来ます。

（歴史民俗資料館）